

## Web 公開用研究成果概要

所 属	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
氏 名	吉川 耕太郎

※本様式は可能な限りデータも合わせてご提供願います

研究テーマ	ゆざわジオパークにおける珪質頁岩の産地特性と先史人類の利用に関する考古学的研究
-------	-----------------------------------------

関連分野	考古学
------	-----

※研究分野（地質学／考古学／教育学等）について記載願います

対象フィールド	ゆざわジオパーク
---------	----------

※研究対象のジオパーク名（複数の場合は全て）記載願います

キーワード	珪質頁岩 石器石材 先史時代
-------	----------------

※研究に関するキーワードを 3 点程度記載願います

## 研究成果概要（A4 用紙で 1 枚程度）

日本列島の先史時代（旧石器・縄文時代）は考古学上、石器時代といわれ、主要利器の素材には石が用いられていた。なかでも黒曜石・珪質頁岩・サヌカイトは日本における三大石器石材として知られる。これらの石器石材は当時の人々にとって生活を切り開くために必要不可欠なものだった。東北地方の先史人類はそのうち珪質頁岩を主な石器石材資源とした。

これまでの考古学的な調査研究では東北地方でも日本海側、とくに山形県最上川流域で珪質頁岩が豊富に産出し、後期旧石器時代以降の原産地遺跡が形成されていることが明らかとなっていた。そうした状況の中、申請者はこれまでに秋田県域で珪質頁岩の分布状況と遺跡での利用状況の調査を進め、秋田県域も最上川流域と同様に重要な珪質頁岩産地であることを明らかにしてきた。さらに、石器石材に耐えうる良質な珪質頁岩産地は、県内でも米代川や三種川、子吉川等で、それらの流域のなかでも限定的な範囲にしか分布しないことも指摘した。一方、雄物川流域では下流域でわずかな産地を確認していたものの、ゆざわジオパークのある雄物川上流域ではこれまで珪質頁岩産地および産地と遺跡の関わりについて研究がなされてこなかった。そこで本研究ではゆざわジオパーク内における珪質頁岩の産地調査を実施し、遺跡出土石器との比較を通して、石器石材資源産地としての同ジオパークの歴史的価値づけを試みた。

なお、申請者は珪質頁岩を肉眼により A 類（半透明で玉髄質のもの）、B 類（珪化度合いが高く油脂光沢の発達した、剥離表面の滑らかなもの）、C 類（珪化度合いが低く剥離表面の粗いもの）に分類している。

対象地域には後期旧石器時代から縄文時代までの多くの遺跡がこれまでに発見されている。それらの遺跡から出土した石器のうち 90%以上が珪質頁岩製である。調査ではゆざわジオパーク内の表層地質を確認し、珪質頁岩が産出する女川層・山内層を開析する沢を中心に現地踏査を実施した。その結果、石器石材として利用可能な珪質頁岩が産出する地点を雄物川や支流皆瀬川流域等で確認することができた。これらの産地の珪質頁岩は各々に肉眼観察上、色調や原石のサイズと形状等に相違点を見出すことができる。また、B類頁岩がメインとなる日本海沿岸産と比較すると、珪化の度合いが低く表面のざらつくことが手触りでも明らかであるし、今回実施した表面粗さ測定機による分析でも数値により客観的に確かめられ、ゆざわジオパーク内では肌理の粗いC類頁岩が中心で、B類頁岩はほとんど見られないことが分かった。また、沿岸部の珪質頁岩には有孔虫等の微化石が含まれ、ラミナの発達するものが多いが、本ジオパーク内に産出する珪質頁岩には実体顕微鏡で観察可能な大きさの微化石は確認できなかった。さらに、停滞水域で堆積・形成された珪質頁岩に特徴的にみられるというラミナ（秦 2015；秦昭繁氏のご教示による）が見られるものもなかった。一方で沿岸部同様、節理の発達は著しい傾向にあった。以上のように、沿岸部との石質上の違いが今回の調査で明らかとなった。

つぎに遺跡内出土石器との比較を試みた。主に対象としたのは湯沢市域に所在する後期旧石器時代の新処Ⅰ・Ⅱ遺跡、縄文時代早期の岩井堂洞窟遺跡、同前期の臼館跡、同中期の堀量遺跡、同後期の長蓮寺遺跡・堀ノ内遺跡、晩期の鏡田遺跡である。これらの遺跡から出土した石器は殆どがC類頁岩製であるが、石鏃や石槍、石匙などにはB類頁岩製も含まれている。産地と遺跡との距離的關係について、新処Ⅰ・Ⅱ遺跡は直近に石材産地を有さないものの、直線距離で約 5.5km の地点に今回新たに発見された生内沢の産地がある。岩井堂洞窟では雄物川を挟んで対岸の北東約 1km の地点に松根川の産地が確認された。この松根川産地から臼館跡までは約 1.5km 離れている。一方、堀量・堀ノ内遺跡については周辺の河川で珪質頁岩の分布は認められない。これらの遺跡に最も近い頁岩産地は、遺跡から東方へ約 7km、三本鎗山帯を越えた皆瀬川流域羽竜地区の今回新たに発見された地点のみである。三途川層が広く分布する長蓮寺遺跡も周辺に利用可能な珪質頁岩は存在せず、直近の産地は遺跡から北へ約 7.5km の地点にある上述の羽竜地区である。鏡田遺跡も周辺の河川流域には石器に利用可能な珪質頁岩は分布せず、北西へ約 6km の羽後町五輪坂自然公園地区が直近の産地である。

以上、湯沢市域においてC類珪質頁岩産地として4箇所あることが今回新たに確認され、なかでも生内沢は豊富な産出量であることは分かった。ゆざわジオパーク内には考古学上重要な遺跡が数多くあり、産地直下型の遺跡は皆無であるものの、すべて産地から8km以内の地点に立地していることが分かった。ただ、石器の中に少数認められた、有孔虫を含みラミナが見られるようなB類頁岩については、ゆざわジオパーク内に産地を確認することはできなかった。石質の特徴からこれらの頁岩の由来は日本海側沿岸部に求められるであろうことが予測される。また、今回は調査の対象範囲外であったが、奥羽山脈を挟んで岩手・宮城県側の先史時代遺跡からは多くのC類頁岩が出土している。太平洋側では珪質頁岩自体の産地がほとんど認められないことから、ゆざわジオパーク内に産出する珪質頁岩が奥羽山脈をまたいで太平洋側へ流通した可能性が高いと考えられる。

秦昭繁 2015 「東北地方における珪質頁岩と小山崎遺跡石器の原産地調査」『小山崎遺跡発掘調査報告書総括編』遊佐町教委